

Op.30

月光ソナタ

仮眠 仮死 意識

音もなく上がる仮の幕

瞳の刷る版画

いつもの帰路の電車内

横に滑る連結車両の音

下に墮ちる連結雨粒の音

異なる和音

交差と衝突の対位

温白色に反射す

やわらかな月の光

底に近づく急襲の雨
ほとんどからの 瓶のくち
ぼとり ぼとりと墮ちる余韻

そこかしこの水たまり
表面に波紋
幾重にも 広がり 消え
表面に波紋
幾重にも 広がり 消え

温白色に反射す
やさしい月の光

黒く濡れたアスファルト
油の弾く水
街の灯りの混合色
油の弾く水
街の灯りの混合色

厚みの増した暗い川
街灯の色彩
浮かんで 歪み
街灯の色彩
浮かんで 歪み

温白色に反射す
影を生む月の光

Op.31

雨のエチュード

傘に着地する音で雨を知る

ばらり ばらりと 断絶の音
ばらり ばらりと 規則的な音

唇に触れる冷たさで雨を知る

ぼわん ぼわんと 小さな口づけ
ぼわん ぼわんと 真水じゅんまいの純味

湿気に満ちた草葉の匂いで雨を知る

ふあん ふあんと くすぐる鼻先
ふあん ふあんと 異質の香水

ヘッドライトの灯りで雨を知る

つつ 　 つつと 　 無数の爪痕

つつ 　 つつと 　 無数の流星

Op.32

「不可視」のフーガ

身体にからむ 厚手の夜風

前から 後へ 右から 左へ

身体にからむ 厚手の夜風

後から 前へ 左から 右へ

「後のみ悔いる 自らへの慰め」

耳元で響く 鈴の音

前で 後で 右で 左で

耳元で響く 鈴の音

後で 前で 左で 右で

「螺旋を進む 時計の秒針」

信号機くぐる車 車

前へ 後へ 右へ 左へ

信号機くぐる車 車

後へ 前へ 左へ 右へ

「人生に透ける標識 一方通行」

「自由と誤魔化す 方向音痴」

Op.33

幻想的ソナタ

黒雲透かして細いひび
澄漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音
代わる代わるに光と闇と

緑にやつす桜の樹々
闇に憑かれて 風を待つ

あの桜 あのときの桜
悲喜交々 記憶の花びら

黒雲透かして細いひび
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音
代わる代わるに光と闇と

鳴き声だけのツクツクボウシ
光畏れて 日暮れ待つ

あの陽光 あのときの陽光
悲喜交々 記憶の照明

黒雲透かして細いひび
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音
代わる代わるに光と闇と

地面を埋める銀杏の枯葉
紅葉を見上げて 気分の高揚

あの赤黄 あの強烈な臭気
悲喜交々 鮮明と褪色

黒雲透かして細いひび
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音
代わる代わるに光と闇と

分離する 光の粒子 粒子
具象する 白い真綿 真綿

あの白さ あの片栗の靴音
悲喜交々 白無垢の泥汚れ

黒雲透かして細いひび
橙漏れて 橙と黒の明滅

田舎町の黒い一本道

等間隔の揺れない蠟燭

左右交互に靴裏の音
代わる代わるに光と闇と

凱歌か 沈黙か

Op.34

並遷

更新 更新 更新
デジタル 時計の数字

無音 無音 無音
時の足踏み

無意識
真っ直ぐな道
上のカギ括弧

無意識
真っ直ぐな道
下のカギ括弧

グレイー色
チェスの盤面

戸惑うナイト
素知らぬ他の駒々

行進 行進 行進
それぞれの足音

直進 直進 直進
それぞれの目的地

無意識
真っ直ぐ
左折

無意識
真っ直ぐ
右折

目に映る景色
ポスターの写真

カバンに詰めた感情
開演前の劇中衣装

歩進 歩進 歩進
機械式 時計の秒針

刻音 刻音 刻音
時の前進

頭上に空いた穴
降り注ぐ光の鋭利

頭上に空いた穴
溶け漏れる光の蓄熱

跡の残らぬ穴の軌道
大きく緩やかな半円

地平から昇り
地平へと沈んでゆく

疲労 疲労 疲労
終幕の役者の狭い歩幅

軽快 軽快 軽快
我が家という名の控室

頭上に空いた穴
鎮められた間接照明

頭上に空いた穴 穴
季節ごとに変わる演目

跡もなく呑み込まれる穴
完璧なフェイドアウト

跡もなく埋め隠される穴
完璧なバトントス

時の流れ 二卵性

Op.35

瞬光

今夜も見えぬ あの夜の月

眠る街 光の点灯 冷えた沈黙

順に 横へ 横へ

青 黄 赤 青 黄 赤

トリコロール スライドループ

いつ来るか わからぬ車

いつ生まれるか 分からぬ意義

いつ いつでも 瞬間 瞬間

眠らぬ街 光の明滅 醒めた許容

順に 上へ 下へ

青 点滅 赤 青 点滅 赤

ツートーン アップアンドダウン

斜めに細長く 人影多少 黒と黒

横断歩道の平行線 白と黒のイコールノット

昼夜を問わず 今 そして今

眠たい線路 警笛の点灯 寝る支度

忙しくなく 上へ 下へ

赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤 赤

ユニカラー フラッシュ フラッシュ

最終電車 遠ざかる裏の顔

ようやく消灯 立って眠る真の夜

始発のアラーム 鳴るまでの 無面の夢

橙の冷たい陽光

目の中で ちらつく青アザ

方向違いの冷たい陽光

身体につけた不可視の青アザ

Shining and Shining

Op.36

時と光のフーガ

宇宙の中心 太陽

その周囲を地球は回る

地球も自ら回り続ける

時を知らせる 三針

盤面の数字を順になぞる

同じ律動でなぞり続ける

まだ朝と知らせる 街灯

白み始めた空に重なる光

ただ灯っているだけの光

蒼天に霞む白い月

熱のない尖った太陽

煉獄の炎に灼ける太陽

鍛えられ水に冷める太陽

黄色に映える白い月

もう夜と知らせる 街灯

まだ明るい空に重なる光

ただ灯っているだけの光

時を知らせる 三針

盤面の数字を順になぞる

同じ律動でなぞり続ける

宇宙の中心 太陽

その周囲を地球は回る

地球も自ら回り続ける

時を知らせる 三針

盤面の数字を

Op.37

真我

あの太陽が 太陽であるゆえん
その光にか その熱にか あるいは

この月が 月であるゆえん
その照りにか その蝕みにか あるいは

長く伸びた雑草の上
あの蜻蛉 この蜻蛉
宙を跳ね 跳ね 周る

「あの」もなく
「この」もなく
蜻蛉
透明の蜻蛉
乾空に漂い 漂い
流れ 流れる

太陽が

太陽であるゆえん

光にか

熱にか

あるいは

月が

月であるゆえん

照りにか

蝕みにか

あるいは

夏の緑葉 宿る色艶

秋の黄葉 乾いた輪郭

枝から離れ ひと息に 落ちる

「あの」もなく

「この」もなく

枯葉

色褪せた緑葉

乾風を祈り

待ち

樹の根

焦がれる

太陽が
太陽であるゆえん
名前にも
活動にも
いずれにも

月が
月であるゆえん
容姿にも
環境にも
いずれにも

終着駅 到着の電車
開くドア 次々に 脚 脚
窓々の影 横々に 背中 背中

「あのひと」 「このひと」
丸い集団 点々の円陣
そこかしこ 解けて 組まれ

自分が自分である所以
何に 何で いったいどこに

自分が自分である所以
何にも 何でも おそらくどこにも

自分に疲れ 自分で疲れ
頭上を見上げ 空への逃避

「あの」もなく
「この」もなく
空の向こう
あちこちで
きっと星は
ひたすら輝いている

Op.38

生命

昨日

「人身事故が発生しました」

自ら散らした生命

電車のダイヤの乱れ

灰色の雲の連なり

隙間に滲む茜色の朝やけ

電車が揺れて

身体が揺れて

目蓋を閉じて

意識を任せて

灰色の雲の連なり

隙間に覗く乳色の陽光

ホームに入る電車
身体に囁く線路の怨念

この美しき罪夢
この身震いの高揚

只今
「人身事故が発生しました」

また自ら散らした生命
止まる電車 ただの鉄箱

灰色の雲の連なり
隙間に覗く茜色の夕やけ

ホームに入る電車
白い車体に茜色の悲劇

座るシートの冷たさ
事実という透明の悲劇

灰色の雲の連なり
隙間に覗く乳色の月光

血の記憶を浄化せよ
焦りの鼓動を鎮ませよ

身体に残る電車の振動
線路の継ぎ目 継ぎ目のリレー

自ら散らす生命

さだめに散る生命

いつか見る

生命の抜けた
あのひとの亡骸

Op.39

軌跡の三重奏

特急列車 窓の向こう
灰色の防音壁
黒い横縞 線の錯覚
街の家々 孕む曇天の色

始めも 終わりもない 紙芝居

川 流れ 流れて
濁った川面 忍ぶ底
描き 消し 描き
濡れた画布 流紋の無数

再開も 休止もない 川音の鼓動

風 吹き 吹いて
冷える樹木 萎む色艶
吸気の臭気 銀杏の臭気
足裏の粘り 潰れた団栗

喜びも 哀しみもない 風の感触

特急列車 高架の揺れ音
髪乱す風 無言の囁き

黒い川 夜との抱擁
風の音 軽い吐息

青い川 流れぬふり
特急列車 鏡映しの横滑り

人生の記憶

秒針の軌跡

現在進行形

Op.40

振り子

明るい夜 意識の朝
いち枚重ね着 透ける皮膜
頭上の街灯 黄色 諦め

明るい朝 視界の朝
いち枚重ね着 分厚き目蓋
電車の振動 意識 断絶

夕焼けの朝 茜色
後退の夜 気配 足音

昼 正午 白き輝き
極めた頂き 絶対 孤高

朝焼けの夕方 茜色
前進の夜 足音 気配

暗い夜 視界の夜
いち枚重ね着 透ける皮膜
頭上の街灯 黄色 脱皮

明るい夜 意識の夜
いち枚めくれ 露わなる真皮
横たえる身体 意識 断絶

Op.41

光年

もう 何度目の 朝
晩秋の 薄暗い朝
夜の強引な 後押し
この 背越しの 寒風

いま 何度目かの 朝
晩秋の 明鮮な 夜
隠れ 覗いた 夜半の月
街々の 穏やかに 夢うつつ

数え歌も不要な夜
晩秋の 冷え 固まる夜
透け零れる 白い光
白い 街灯の星々

月めくりのカレンダー
あと数枚 透け見える壁

時の流れの早さ
腕元の秒針の律動

陽光の 宿す影
月光の 宿す影

差し延べる 細長い手の影
すり抜け 落ちる 光年の記憶

Op.42

綴織のフーガ

地熱に冷えた 風

見上げる空 青い暗幕
地平の際 茜の縁取り
街の街灯 薄まる影

走る電車に撥ねる 風

車窓の向こう 茜の開幕
醒めた舞台 尖光の花束
反射の拒絶 終幕の目蓋

始陽も孕まぬ 風

吸い込む大河 水底の底
常緑の葉々 飛沫の玉粒
顔での破裂 身の震い

頂陽も挫けぬ 風

壁の厚み 灰色の盾
醒めた世界 尖痛の矛
心象の麻痺 解毒の点滴

終陽そのものの 風

葉々の隙間 流れる滝
胸中のざわめき 影呑む光
重たい足取り 影呑む闇

煌々と照る月 隠さぬ蒼斑

Op.43-1

地上のイデア

変わらない 平日の帰路

秋 涼しく 肌寒い風
涼しさ 消えかかる太陽
肌寒さ 冷めてゆく地表
上着の下 毛穴の痺れ

繰り返すだけの 日々の務め

秋 涼しく 寒い風
涼しさ 現われ隠れる月
肌寒さ 冷めきった地表
上着の下 怯える動悸

あと寝るだけの いち日の終わり

冬 寒く 冷たい風音

寒さ 秋風の断層
冷たさ 秋風の予告
照らす月 輝くオリオン

また朝 いつもと同じ目覚まし

冬 寒く 冷たい風
寒さ 秋風の更新
冷たさ 真冬の到来
陰る月光 透ける夜空

同じ駅 同じ時間 同じ電車

春 冷たく 温い風
冷たさ 冬の名残り
温さ 雪解けの光
照らす夜桜 透ける花脈

同じ仕事 同じ開始 同じ終了

春 冷たく 温い風
冷たさ 桜の木陰

温さ 葉桜の木漏れ日
照らす新緑 生命の輝き

ただ寝るだけの つかの間の休日

夏 鈍く 厚い風音
鈍さ 春風の蓄熱
厚さ 幾重もの衝突
目蓋の裏 赤い網目

退屈も凌げぬ つまらぬ時間

夏 鈍く 厚い風音
鈍さ 春風の膨張
厚さ 消されぬ肌の記憶
眼前の眩さ 青い星々

地上のアイデア 慣性の類列

Op.43-2

天上のイデア

透け見える 星々の棲家

秋 涼しく 肌寒い風

涼しさ 聖堂の空調

肌寒さ 他者の不在

微昇の体温 自前の温もり

透ける天井 塗り潰す油彩

秋 涼しく 寒い風

涼しさ 隠匿された月

肌寒さ 埋隠された星

微降の体温 肌のさざ波

透明な黒い天井 沈黙の聖堂

冬 寒く 冷たい風音

寒さ 聖堂の隙間風
冷たさ 足音の独奏
照らす月 告発の運命

地表の回転 不動の中心

冬 寒く 冷たい風
寒さ 聖堂の壁の消失
冷たさ 柱と柱の谷間風
陰る月光 闇色の外套

天井の向こう 昇る太陽

春 冷たく 温い風
冷たさ 聖堂の柱
温さ 柱を引き上げる陽光
散りゆく桜 消えゆく砂絵

天井の向こう 沈む太陽

春 温く 冷たい風
温さ 聖堂の柱の輝き

つめたさ 萎む柱の輝き
深緑の葉桜 地表に落とす影

天井の向こう 頂点の白日

夏 鈍く 厚い風音
鈍さ 地表の過熱
厚さ 熱と光の十二単
目蓋の際 流れる塩気

天井の向こう 反比例の距離

夏 厚く 鈍い風音
厚さ 聖堂との隔たり
鈍さ 忘却の信仰心
眼前の眩さ 神の威光

天上のアイデア 自分のない世界

Op.44

永遠の夜

閉じられてゆく 天蓋
仕舞われてゆく 夜空

溶け広がる 水平線の橙
濁った藍色 天蓋の裏地
横長の雲 灰色の 横長の雲

閉じられた 天蓋
仕舞われた 夜空

冷え固まる 水平線の橙
丸まった黄玉 照射の始動
横長の雲 うすはいいろ 薄灰色の 横長の雲

継ぎ目のない 天蓋
映し出された 朝空

白球の輝き 光と熱の分離
揺れる木陰 忙しない交差の人影
横長の雲 しろずみまだら 白灰斑の 横長の雲

無機質の建屋

無数のビル群

壊れた電子レンジ

設定時間 解放の瞬間

左右に割れる 天蓋

映し出された 夕空

切れかかる白球 光と熱の後退

佇む木陰 忙しない交差の光 光

横長の雲 白灰斑の 横長の雲

開けられてゆく 天蓋

戻されてゆく 夜空

冷え固まる 頭上の橙

丸まった黄玉 おうぎよく 蒼玉 そうぎよくの始動

横長の雲 薄灰色の 横長の雲

開けられた 天蓋

また現われた 夜空

隠された月 疎らな星粒
濁った藍色 天蓋の裏地
横長の雲 濃灰色の こいばいいろ 横長の雲

天蓋の向こう 永遠の夜

永遠の夜 神聖の法則